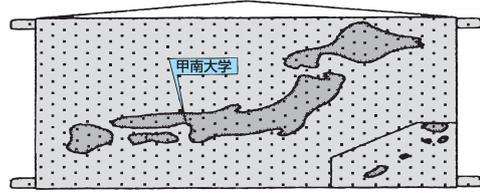


Zephyr

〈第55号〉

ゼフィール・にしかぜ



<http://www.kilc.konan-u.ac.jp>

《特集：ぜひ読んでほしい一冊》

★所長からのメッセージ：外国語を学ぶ意味について考えるために――

藤本一勇『ヒューマニティーズ 外国語学』	中村 典子	2
〔英語〕 漱石の『こころ』英語翻訳版『Kokoro』 ――自文化・異文化理解のための一冊	中村 耕二	3
〔ドイツ語〕 ヴィクトール・E・フランクル『夜と霧』	柳原 初樹	4
〔フランス語〕 ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』(Les Misérables)	ディディエ・シッシュ	5
〔中国語〕 日本人・中国人の相互理解のために	胡 金定	6
〔韓国語〕 真の韓国・韓国人・韓国語を理解するための本	金 泰虎	7
〔日本語〕 三上 章『象は鼻が長い』	谷守 正寛	8

甲南学園創設者

平生 鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語+1 (第2外国語)」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙 (年3回刊行)

――書物を読むということは現実の体験なのです。体験の代替物ではありません。そしてそれ以上に、体験に粹組みと深さを与え、次なる体験へと導いてくれる何かなのです。

(四方田犬彦『人間を守る読書』文春新書 2007)

――読書は、一定の精神の緊張を伴う。この適度の緊張感が充実感を生む。読書は、一人のようで一人ではない。本を書いている人との二人の時間である。著者は目の前にいるわけではないので、必要以上のプレッシャーはない。しかし、深く静かに語りかけてくる。優れた人の選び抜かれた言葉を、自分ひとりで味わう時間。この時間に育つものは、計り知れない。

(齋藤孝『読書力』岩波新書 2002)

甲南大学の学生のみなさん、本を読みましょう。通学の電車の中で、携帯のゲームで時間を空費せずに、文庫本・新書を手に取りましょう。インターネットの情報に振り回されずにそれを使いこなす自分自身を大学時代に確立し、成長させていかなければなりません。読書は、その後の人生を切り開いていくエネルギーです。本号で国際言語文化センターの教員がおすすめする一冊を参考にして下さい。さあみなさん、本屋へ(三宮にも JR 住吉にも梅田にも巨大な書店があります)、そして大学の図書館へ！(石井康一)

外国語を学ぶ意味について考えるために——

藤本一勇『ヒューマニティーズ 外国語学』(岩波書店、2009年)

国際言語文化センター所長 中村典子

——言語を「替える」ことは、発想や行動を「変える」きわめて有効な手段の一つである。ソシュールが言うように、「言語は観念を表現する記号の体系」であり、数あるメディアのなかでも、直接的に思考に結びついているからだ。言語を替えれば、如実に思考が変わる。まるでコンピューターのOSを切り替える場合のように。(同書、p.41)

グローバル化が進み、多文化共生が叫ばれる今日、外国語を積極的に学ぶのは当たり前のようにも思われます。「社内公用語を英語にする」と宣言する企業もあれば、エントリーシートにTOEICの点数や語学検定試験の級を入力するように求める会社もあり、外資系やグローバル企業を目指す場合には、外国語の高い運用能力が求められるでしょう。とはいえ、大学生の皆さんが全員、外資系やグローバル企業を志望するわけでもありません。そもそも、私たちは、何のために外国語を勉強しているのでしょうか？ また、外国語学習の目的は、「実用性」のみに還元されるのでしょうか？ 私は、学生時代から、他の国を訪れる機会が生じると、嬉々として当該国の言語をかじったり、辞書を手に入れたりして、これまでにイタリア語、ドイツ語、トルコ語の簡単な表現を覚え、現地で辞書を引いてきました。また、フランス語の教員になってからも、NHKのラジオ講座でスペイン語に取り組み、ドイツ語については、本センターの1年次の授業を聴講させてもらいました。「単なる言語オタク」の傾向のある私は、母語以外の言語で意思の疎通を図ることが、なぜか愉快なのです。

さて、この本は、「外国語を学ぶ」背景とその意味について考えさせ、言語一般が持つ「権力」についても再認識させてくれます。「近代の曙において外国語が国際政治権力と結び」付き、当時の最先端の欧米先進諸国の知識や技術は、英仏独の原語で学ぶのが効率的だとされていたし、基本的に、外国語教育は「19世紀から20世紀の欧米帝国主義の権力構造によって規定されている」(同書、p.3)と著者は述べた上で、「英語帝国主義」や「多文化主義」も取り上げ、その用語を根底から問い直すようなコメントを付しています。藤本氏の専門が哲学(フランス哲学)であるがゆえに、ヨーロッパの哲学者たちの名が散見されますが、本書は決して難解ではなく、むしろ言語学や哲学への興味がそそられるでしょう。「フィヒテ VS ルナン」、フランスの哲学者デリダの論じる「言語の他者性」は、言語というシステムをどう捉えるかを考えるための項目です。「そもそも言語一般が、すなわち国語、『母語』と言われるものさえもが、その使用者にとって他者である」し、「誰もが自分の言語を自分で選択したわけではない」(p.88)からこそ、外国語という「別の言語の選択」が、自分を変えるための手段となりうるというのです。「マイナー言語」の項目で引き合いに出される「アイヒマンと杉原千畝」の比較は秀逸を極めるし、ヒトラーの支持者でありながら、教会のナチ化に反対して収容所送りにされたマルティン・ニーメラー神父の衝撃的な詩(pp.110-111)は、是非とも知っておいてください。本書の終章は、外国語の問題を考えるための読書案内ですが、その直前の章の最後の一節を引用しておきます。

「(…) 外国語を学ぶことは、他者の言語と接する具体的な場を提供し、また他者性への感受性、はたまた他者との関係がはらむ様々な問題(権力関係、差異関係、抗争関係、その他)への感受性を育む訓練=試練として機能しうるだろう。言語という、本来的に他者とのコミュニケーション(やディスコミュニケーション)あるいは他者性・異質性に開かれたメディアのあり方を特徴的に映し出す外国語は、言語やそれとかわる人間や社会を私たちに思考させてくれる貴重な通路(パッセージ)の一つなのである。」(同書、p.119)

漱石の『こころ』 英語翻訳版『Kokoro』 —自文化・異文化理解のための一冊

国際言語文化センター教授 中村耕二

大学時代に漱石の『こころ』英語翻訳版を是非読んでいただきたいです。この作品は明治以降のベストセラーであるだけでなく多くの外国語に翻訳され、世界の人々に感動を与えています。英語と日本語でじっくりと読み返すと、この偉大な作品が自文化理解・異文化理解のテキストとして蘇り、人生の宝になります。私は英語翻訳版『こころ』をテキストとして甲南大学に学ぶ留学生と共に、日本人の深層心理を探りました。留学生の多くが、「知らないうちに読者を先生の聞き手である私に変身させ、これほど読者を物語に誘う文学作品は初めてです。」と言います。留学生は第三章『先生の遺言』を、途中で止められなくて一気に読み通し、帰国したら母や恋人にも読んでもらおうと言います。では、なぜ漱石の『こころ』が1世紀を経て評価されるのでしょうか。

『こころ』を読むと、漱石の人間分析の鋭さや、近代合理主義がもたらす孤独に苦しむ現代人の心の内側が見えてきます。主人公の心を通して、近代化と対峙する漱石という作者の主体性が垣間見えます。漱石は作品において、愛の可能性を描き、同時に愛の無常を教えてください。文壇のために作品を書いたのではなく、朝日新聞に連載し、明治の心とは何かを世に問い直す漱石は、武者小路実篤の言葉を借りれば、「国民的先生」です。

漱石は慶応3年に生まれ、明治の精神と共に生き、大正5年享年50歳で他界しました。秀才漱石は1900年から2年間、近代化を謳歌する英国からその叡智を獲得するためにロンドン大学で学びました。しかし、漱石は近代合理主義の自由と我執がいかにかに人の心を奪い、その代価として、人が孤独感と寂寞に苦しむことを予見しました。「夏目狂せり」との風説乱れ飛ぶ中で帰国した漱石は、鷗外と異なり西洋文化不適応と思われました。それは彼が西洋かぶれでなく、明治の精神を持った日本人だったからです。「脱亜入欧」を標榜する当時の知識人とは異なり、漱石は近代化と西洋文明のもたらす孤独の問題を自らの作品を通して、日本人に語りかけます。

- ・“You see, loneliness is the price we have to pay for being born in this modern age, so full of freedom, independence, and our own egotistical selves.” (Kokoro p.30)
- ・「自由と独立と己れとに充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう。」 (こころ p.47)

漱石の作品は、世界の言語に翻訳され、国会図書館には漱石に関する英語の博士論文も多いです。近代に生きる人間の孤独な影を鋭い洞察力で描く漱石文学は今や世界の誉です。100年を越えても幅広い読者層を持つ漱石はシェイクスピアに通じるものがあります。それは「過去」の自分自身を見失うことなく「現在の自分」と真剣に対話して、「未来」の自分をも予測しているからです。漱石が留学中に『オセロ』、『ハムレット』、『マクベス』などのシェイクスピアの作品を学び、帰国後は東京帝国大学でシェイクスピアの講義を担当し、その講義はとても人気があったそうです。漱石の悲劇『こころ』における先生の愛の苦悩とシェイクスピアの三大悲劇の『オセロ』における愛の苦悩を読み比べてみましょう。愛と嫉妬と Dramatic Irony という文学の重要な共通点があります。

漱石は意図的に『こころ』において物語を完結していません。作品には秘密が隠されています。読者の想像に物語の未来を託し、先生が死と向き合う中で、青年の私に妻の静を請託するという未完成の中の完成が見られます。長い物語でありながら、俳句のような「間」と「遊び心」が漂い、俳人漱石を感じます。重い悲劇でありながら、読後の爽やかさは不思議です。江藤淳も『こころ』の結末に関して『漱石の微笑み』の中で次のように結論づけています。「未完成の大作の結末を予想するのは、読者に許された幸福な特権である。」(1979, p.154)

漱石の価値は、近代化の波に日本人の多くが翻弄された明治時代にあって、一見時流に超然としていたかに見える漱石が、実は最も鋭く我々に迫りくる心の危機感を察知し、登場人物にそのまま胚胎する「我執」と「孤独」の苦しみを告白したことです。孤高に生き、「則天去私」を理想とする漱石が、己の理想と「我執」との葛藤に苦しんだことは、きわめて人間的であり、「則天去私」の悟達への苦悩を主人公の心を通して、100年後の私達にも語りかけてくれるのです。日本語と英語で読むと、さらに漱石文学の普遍性に気づき、自文化理解・異文化理解の扉が開きます。是非この夏休みに漱石の『こころ』を日本語と英語で読み比べ、日本人の心を見つめ直し、作品に隠された漱石の秘密を発見しましょう。

ヴィクトール・E・フランクル著『夜と霧』(みすず書房)

国際言語文化センター准教授 柳原初樹

著者のフランクル(1905-1997)はユダヤ系オーストリア人の精神科医で、在学中よりアドラーやフロイトの下で精神医学を学びました。1933年から、ウィーン精神病院で女性の自殺患者部門の責任者を務めていましたが、ナチスによる1938年のドイツ・オーストリア併合で、ユダヤ人がドイツ人を治療することが禁じられ、任を解かれました。1941年12月に結婚しましたが、その9ヶ月後に家族と共にテレージエンシュタット強制収容所に収容され、父親はここで餓死しました。フランクル夫妻、母親と兄は1944年10月に絶滅収容所であるアウシュビッツに送られましたが、彼だけが3日後にテュルクハイムに移送され、1945年4月にアメリカ軍により解放されました。他の家族は亡くなりました。

強制収容所での体験をもとに著した『夜と霧』は、日本語を含め17カ国語に翻訳され、65年以上に渡って読み継がれています。ドイツ語の原題は「…trotzdem Ja zum Leben sagen. Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager」(1947年初版)です。邦訳のタイトル『夜と霧』は恐らく、強制収容所の記録映画を作ったフランスの映画監督アラン・レネの作品『夜と霧』を敷衍しているのでしょう。原題の意味は、「…それにもかかわらず、人生に『是』を言う。一人の精神科医強制収容所を体験する」です。この「…それにもかかわらず」という言葉が暗示しているように、この作品は、強制収容所の凄まじく、陰惨で、目を覆いたくなるような現実にもかかわらず、人間の内面に焦点を当てています。

彼が、収容所の中で、生き抜くためになした凄まじい生き方、考え方、価値観のコペルニクスの転換とは何だったのでしょうか。通常、我々は、自分の欲求や夢の実現の「場」として「人生」を捉えています。しかし、強制収容所においては、一切の「夢」、「希望」、「自分の欲求」は存在し得ないのです。それでも、生きていくには、必然的に「生きる意味」を問い、自分の欲求を追い求めるのではなく、絶望的な状況にあっても、自分は何のために存在するのか、「人生は私に何を求めているのか」を問い続けねばならない、「人生からの根源的な呼びかけ」にตอบสนองねばならないとフランクルは語ります。

また、フランクルは収容所内での自殺防止のためにも尽力します。「生きていることにもうなんにも期待がもてない」というふたりの仲間に対して、一人には、「彼を待つ子供の存在」を、もう一人には、「余人をもって代え難い研究書の発刊継続」を想起させ、彼らの存在の「かけがえのなさ」、「個々の存在に意味をあたえる同一性と唯一性」を意識させました。フランクルは語ります。「このひとりひとりの人間に備わっているかけがえのなさは、意識されたとたん、人間が生きているということ、生きつづけるということに対して担っている責任の重さを、そっくりと、まざまざと気づかせる。自分を待っている仕事や愛する人間に対する責任を自覚した人間は、生きることから降りられない。まさに、自分が『なぜ』存在するかを知っているの、ほとんどあらゆる『どのように』も耐えられるのだ。」

「ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。(絶望との闘い)」。この文章に込められた思想は逆説的で難しいかもしれませんが、まさにこの問いかけこそが、この書物を永遠のベストセラーにしています。

人生の究極の意味として、フランクルは「愛」について語っています。それは、「満たされる愛」ではなく、「愛しつづける霊の運動」とも言えるような「愛」です。「その時、ある思いが私を貫いた。… 愛は人が人として到達できる究極にして最高のものだ、という真実。今、私は、人間が詩や思想や信仰を通じて表明すべきこととしてきた、究極にして最高のことの意味を会得した。愛により、愛のなかへと救われること！… その時、あることに思い至った。妻がまだ生きているかどうか、全くわからないではないか！そして私は知り、学んだのだ。愛は生身の人間の存在とはほとんど関係なく、愛する妻の精神的な存在、つまり哲学者のいう『本質』に深くかかわっている、ということ。… 愛する妻が生きているのか死んでいるのかは、わからなくてもどうでもいい。それは、いっこうに、私の愛の、愛する妻への思いの、愛する妻の姿を心の中に見つめることの妨げにはならなかった。」

NHKの「100分de名著」の解説者で臨床心理士の諸富祥彦教授は、NHKの「ラジオ深夜便」でフランクルの思想を紹介した後、一通の葉書を受け取られたエピソードを紹介しておられます。「私は今、五十代半ばのホームレスです。仕事を失い、家族も失って、もう人生を投げ出してしまおうと思っていました。死のうと思っていたのです…。そんな時、たまたまつけたラジオで、先生の、フランクルのお話をうかがいました…。もう少し、生きてみようと思います。ありがとうございます。」

ヴィクトル・ユゴー 『Les Misérables』

国際言語文化センター教授 ディディエ・シッシュ

最近、日本で、『レ・ミゼラブル』というミュージカルを元にした映画が人気を集めています。このミュージカルはイギリスで作られましたが、その起源は、フランス文学で一番有名な小説 *Les Misérables* です。フランスの文化とフランス人のメンタリティーを知るために、この作品を読むことは不可欠だと思います。

Les Misérables の原作者はヴィクトル・ユゴーです。1802年に生まれ、1885年に亡くなった彼は、19世紀のフランス文学界を支配した作家です。ユゴーは、ロマン主義運動の旗手であると同時に、当時の政治的論争に積極的に参画し、共和主義を支持する象徴的な作家となりました。1830年代からユゴーの詩集・演劇・小説などの著作は、社会に大きな影響を与えるようになります。そして、1862年に刊行された *Les Misérables* は、世界的な評価を得ました。フランスでは、その10年ほど前に、ナポレオン三世のクーデターにより第二共和制が倒され、独裁的な帝政が復活しました。これに強く反発したユゴーは、ベルギー経由でイギリス海峡のジャージー島、次いでガーンジー島に亡命します。ユゴーは、1851年末から1870年までの20年間、ここで亡命生活を送りながら、共和制と自由と人権のために戦うことを使命としました。*Les Misérables* は、このような状況で著された作品で、作者の戦いに大いに貢献したと言えるでしょう。

そのタイトルは「悲惨な人々」という意味です。なぜなら、全ての登場人物が、社会的・政治的、ひいては精神的に過酷な状況で生きているからです。内容を纏めれば、主人公のジャン・ヴァルジャンは、パンを一つ盗んだことをきっかけに、19年間の強制労働の刑を強いられます。やっと出獄した彼が、自らの社会への憎しみ、社会からの不信感と敵意を乗り越えるために葛藤する物語です。登場人物は、それぞれが当時の社会を反映する象徴的な存在になっています。例えば、コゼットは幼児虐待の犠牲者、テナルディエは拝金主義の詐欺師、ジャヴェール警部は官僚的執念の権化、ミリエル司教は慈愛と信頼、ファンティーヌは労働者であり女性である上に、未婚の母という幾つもの重荷を背負った弱者、マリユスは共和国の理念のために戦う若き理想家、ガヴローシュは民衆の子供といった具合です。現代のフランス人にとっても、彼らの名前は一般名詞のように使われています。

一方、幾つもの歴史的・政治的な出来事が、話の筋から脱線する形で言及されています。例えば、ワーテルローの戦いを描写することで、間接的にナポレオン皇帝について言及し、7月王政のルイ・フィリップ王への見解を述べています。また、読者は、フランス革命についての彼の考えを推し量ることができます。つまり、フランス革命が1789年に勃発し1799年に終わるという定説に反して、ユゴーは、フランス革命はまだ終わっておらず、19世紀の人間が、教育や女性の解放を通してフランス革命を終わらせる使命を持つと考えているのです。他にも、社会学的・言語学的な考察も多く、小説の域を越えた総合的な作品であると言えるでしょう。

勿論、ユゴーの壮大な企図を理解するには、*Les Misérables* を読むのが一番です。アングロサクソン系文化の解釈によるシナリオでは、舞台にしても映画にしても、単純過ぎる気がします。フランス人から見ると、「神」や「愛」が強調され過ぎているのです。ユゴーの宗教観については、本が何冊も書ける程複雑なのですが、少なくとも言えることは、彼は、人を救うのは神の恩寵ではなく、社会の信頼であると考えているということです。英語の台詞に出てくる「God」を「正義」に、Loveを「信頼」に置き換えてみると、ぐっと原作の価値観に近づかずはです。

最後に *Les Misérables* の冒頭の言葉を引用します：

法律や慣習により社会的断罪が行われ、文明の真っ只中に、幾つもの地獄が人工的に作り出され、人間の宿命が、神の与えた運命を複雑にしている限り、今世紀が抱える三つの問題：プロレタリアであることによる人間の尊厳の喪失、飢餓による女性の失墜、闇による幼児の衰弱がある限り、そして、社会的停滞に陥る地方があり得る限り、別の言葉で、もっと広い視点から言えば、世界に無知と悲惨がある限り、この類いの本が無用になることはないだろう。 (私訳)

『レ・ミゼラブル』(ちくま文庫)(西永良成訳) *最新の翻訳

日本と中国はとても近い国です。よく「一衣帯水」という言葉で表現します。関空から飛行機に乗って、2時間ほどで上海に着きます。関空⇔北海道より近い距離です。同じ黄色人種で、文化的にも共通する部分が大変多いことはみなさんをご存知でしょう。しかし、外見的には似ていても、考え方などを細かく観察すると違いが明らかになってきます。

それを分かりやすく解説した本『こんな中国人こんな日本人…ひとりの中国人教師から見た中国と日本』（著者：陸慶和、訳者：澤谷敏行・春木紳輔・切通しのぶ、関西学院大学出版会）があります。著者は「まえがき」で、「日本人は朝大阪にいて、昼には上海に着き、夜はまた自宅の風呂につかることができる」「文化的には日本は歴史上長期にわたって中国から学び、現在中国人と同じく箸でご飯を食べ、毛筆で文字を書くこともある」と書いています。日本語には中国語と同じ漢字の語彙が多く使われ、日本人と中国人はお互いに相手の言語が分からなくても、「筆談」という手段を活用すれば、ある程度意思疎通ができると誤解されることがしばしばあります。著者は「中国人と日本人はほとんど同じだ」という印象を持って来日したそうです。飛行機から降りて、「制服を着た案内の女性がほほえんで挨拶する。空港職員の人たちは中国人と同じ顔かたち、同じ肌の色で、税関の受付窓口には一目瞭然の漢字が書かれている。私は本当に外国に来たのかと疑った」と。しかし実際に日本社会に溶け込み、「日本人と付き合ってみるとすぐに中国式の付き合い方が役に立たないことに気付いた。中国式の親切は日本式の冷淡に出会い、中国式誠意は敬遠という扱いを受け、直接的な質問は沈黙された。さらに複雑で厳格な礼儀、理解に苦しむ曖昧な表現、訳の分からない暗示など、私は人との付き合いで生まれてはじめて大きなショックを受けた」そうです。私も留学のため1985年来日した際、同じように衝撃を受けました。

似ているようで全く違う両国が相互に理解し合うのは決して簡単なことではありません。交流が深まれば深まるほど、領土問題、歴史問題などでは逆に誤解も増幅し、摩擦が生じます。まさに現在の日中関係は摩擦の時期だといえます。誤解や摩擦はお互いに相手の考え方、付き合い方、文化的な背景、価値観などを理解し合っていないから生じるものです。筆者は「中国人と日本人の間の往来はますます頻繁になるが、広範な接触の中で、どのように誤解と摩擦をなくし、理解と寛容を多くするかは、付き合う当事者ひとり一人に課せられた課題である」と訴えています。

本書の構成は「家族・集団・派閥」「上司部下・友人隣人・弟子親子」「ことば・表現習慣・真意伝達」「呼称・わびる文化・消費観念」「姿勢・プライバシー・非言語表現」の5章から成っています。「主に人との交渉でよく出会う社会の人間関係、心理、言語表現とその他のコミュニケーション手段や方法などについて中日比較を行い、同時にその奥底にある文化背景をも探ってみた」とあり、比較手法による中日比較文化論的な位置付けの本です。決して難しくはなく、学生諸君にもすすいと読み進められると思います。ぜひ一読し、異文化に対する理解力を高めてほしいものです。

以下に、「中国人ビジネスマン」と「日本人ビジネスマン」の比較を列記しました。参考にしてください。〈「社団法人 日本優良品協会」のホームページから引用 <http://www.lpaj.or.jp/chinablog/>〉

【中国人ビジネスマン】		【日本人ビジネスマン】
自分を主張する	⇔	相手に配慮する
話すのが早い、大声	⇔	ゆっくり話す、小声
アグレッシブ、攻撃的	⇔	コンサバティブ、保守的
個人>組織	⇔	個人<組織
遠慮がない	⇔	遠慮が多い
合理的	⇔	社交辞令が多く非合理的
競争意識が高い	⇔	仲間意識が強い
戦略的な考えを好む	⇔	地道な改善活動を好む
効率意識が高い	⇔	品質意識が高い
自己主張が強い	⇔	本音と建前が別々
豊かさ=お金	⇔	豊かさ=生活スタイル
喧嘩して仲直りする	⇔	喧嘩せずに絶交する
言わなくてもやってしまう	⇔	言わなければやろうとしない
明日=今日とは別の日	⇔	明日=今日の延長

真の韓国・韓国人・韓国語を理解するための本

国際言語文化センター教授 金 泰 虎

真の韓国を正確に知り、理解するためには韓国語だけの勉強では不十分であると言えます。すなわち、韓国社会を築いてきた歴史的背景、韓国人の気質や意識を正確に把握しないと真の韓国、ひいては厳密な韓国語の理解までは及ばないことでしょう。さらに、日韓は有史以来、隣国同士で影響を与え合ってきた間柄であるため、両国の交流史や関係史の理解も韓国だけではなく、日本自身の理解にもつながることと思います。

日本では、一般的に 코리아半島に対して「朝鮮」、その歴史については時代を問わず「朝鮮史」と言っている傾向が強く、さらに言語も韓国語よりは「朝鮮語」と主張する論者がいます。朝鮮王朝時代(1392～1896)に当たる事柄に対しては、この名称にこしたことはありません。しかし、他の時代にもこの名称を使うのは、코리아半島の歴史を熟知していないことの証と考えます。코리아半島の歴史では、朝鮮のみならず様々な国名(扶余・高句麗・百濟・新羅・渤海・高麗など)が存在し、今の大韓民国(韓国)に付く「韓」の由来は、すでに古代の歴史において確認されます。つまり、코리아半島の南部に存在していた三韓(辰韓・弁韓・馬韓)がそれです。そして1897年、朝鮮王朝は宗主国であった中国(清)から自立し、なお日本帝国主義の侵略に備えようと国家体制を整えて国名を変える際、朝鮮から「韓」に因む大韓帝国(1897～1910)へ変更を行いました。引き続き1919年、日本の植民地支配期に中国の上海で旗揚げした亡命政府も「韓」ゆかりの「大韓民国臨時政府」という名称を用いたのです。したがって、1948年の政府樹立の際、「韓」の付く大韓民国という名称が突如出現したわけではありません。いずれの時代にも朝鮮・朝鮮語・朝鮮史という用語を当てはめようと固執するなら、韓国の歴史を学ぶ努力が必要でしょう。そこで姜在彦『朝鮮の歴史と文化』(明石書店)を推薦したいです。この書物は、最近、日本で人気を集めている韓国の歴史ドラマを理解する上でも役立つと思います。例えば、多くの日本人の琴線に触れたと言われる「チャングムの誓い(대장금)」という歴史ドラマは、朝鮮王朝や朝廷がその背景にあります。その数々のシーンの中に出てくる歴史用語や当時の政治体制を理解しないと、韓国語は聞き取れても完全な理解までには至っていないことでしょう。

これに加えて、韓国や日本自身を正確に把握するためには、前近代から現在に至るまで日韓の交流史や関係史についても理解を深める必要があると思います。簡単に入手して読むことができる尹健次『もっと知ろう朝鮮』(岩波ジュニア新書)を合わせて勧めたいです。日韓は隣国であるため、交流が盛んで常に政治から民間レベルまで様々な関わりを保ってきました。両国は、概ね平和な関係を構築してきたが、時には侵略で関係がねじれており、そこから相互認識の隔たりも見られます。この認識の相違を克服するためにも、また永久に平和な関係を構築していくためにも、日韓の交流に伴う歴史的事実を正確に知っておくことは重要でしょう。

さらに、韓国人を理解して真のコミュニケーションをとるためには、韓国人の気質や意識を理解したほうがいいでしょう。日本では、韓国は儒教的精神が潜在している社会であると抽象的に言われています。しかし、儒教が韓国人にどのような精神構造や意識をもたらし、他にいかなる影響を与えているのかを知るのが大事なことです。日本人の目線で儒教(朱子学)精神が韓国人にいかなる意識を持たせているのかを紐解いている小倉紀藏『韓国は一個の哲学である』(講談社現代新書)は、韓国理解に欠かせない書物と言えます。つまり、儒教の理念というのは、人間関係・生活空間・社会構造・政治・経済・歴史、ひいては国際関係にまでその影響が及んでいることを明確にしているのです。

これらの書物は韓国の理解や言語力を確固たるものにする上で、大いに活用できると思います。

これは、なぜ象は鼻が長くなったのか、という進化論の本ではなく、象の話でも鼻の話でもありません。実は日本語の話、「は」の話です。筆者の立場からして、日本語教育や日本語学の本を推薦すべきところを、敢えて象の鼻の話、否、日本語の「は」の話の本を持ち出したのは、日本語を教えるといったことに興味を持ったり目指したりする人ではなく、一般の学生さんに広く紹介するのですから、日本語文法の推薦本としては一専門書でもなく、ただ読んだだけで心のどこかの言語領域に引っ掛かる何かを感じる人が、百人に1人はいるかもしれないような日本語の不思議な話を知ってもらうことで足りるだろうし、これが適当だろうと思った次第だからです。筆者が日本語に興味を持ったきっかけともなった本なので、あの時何かが引っ掛かったことを思い出して、ここに引きずり出したわけですが、実は、半世紀以上前のとても古い或る種バイブル的な本です。



(出版社より掲載許可取得済み)

「象は鼻が長い」という言葉はきっと、どこかでいつぞや聞いたような感じが誰しもするほどに有名でしょう。その元祖が、実はこの本だったのです。感動とか情緒を感じたい時には読まない方がよい本ですが、ちょっと屁理屈があるものの、ふだん無意識に使っている日本語のちょっとした知らなかった面に気づかせてくれることで、もしかしたらはっとするかもしれないような語感を刺激するものを感じたければ薦めたいと思います。なぜ象の鼻は長いのかということも面白そうですが、話の焦点は「は」、つまり、「象は」という時の「は」です。たかが「は」されど「は」です。「キリンは首が長い」と言ってもよいところの「キリンは」の「は」です。この「は」は常に何度も繰り返し使っていますが、明快に説明することが難しい日本語文法のエッセンスでもあります。前文文頭にも「『は』は」と、「は」を使っていますが、このタイプの「は」はここまでで十回程度は使っています。知らぬ間に「は」だらけです。

三上の論にはなるほどと感心した記憶があります。ずっとそれについて考えてきて、今では三上とは違う考えによりやく到達しましたが、入り口としては、日本語に嵌り込ませてくれるのに十分な機知に富んだ本の書き方でした。普通の文章ではありません。淡々とではありますが、クイズのようでもあり、「は」が空気のようにあまりにも身近すぎて意識しないものであったために、それだけ想定外というものを感じさせてくれる何かが、この本にはあります。

272頁で2,310円もするのと、アマゾンの中古本でも1,700円を超えていたので、興味があったら借りて読むだけでもいいでしょう。「象は」が大主語で「鼻が」が小主語だなどと言った人もいますが、この本は根本的に違います。この本に関連して、日本語には主語がないとか、主語とは一体何なのかとか、「が」とどう違うのかとか、数え切れないほどの日本語の疑問の世界が広がっていくこと請け合いです。では最後に「は」のクイズを：①僕は人間なのに、「僕はエビを食べるけど君は？」－「僕はウナギだな」と言った時の「は」は主語を指しますか？ウナギとの関係は？②「象は鼻が長い」と言った場合の「鼻」は「象の鼻」、つまり鼻は象の体の一部ですが、「この臭いはガスが漏れているぞ」と言った場合の臭いとガスの関係は？筆者のように、こういう問答が好きな人には向いている本でしょう。